

愛媛県松前町立北伊予小学校

豊かにかかわり、よりよく生きようとする

児童の育成 ～自分ごととして向き合い、考えを深める

道德科の授業の工夫

【要約】

道德科では、道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性を養うことが目標として上げられている。そこで、児童が道德的問題を自分事として捉えることができるような授業展開や発問を工夫しながら、考えを深める道德科の授業の研究を行った。その結果、児童がねらいとする道德的価値について多面的・多角的に考えたり、自己の生き方について考えを深めたりすることができるようになってきた。

I 主題設定の理由

本校の児童は、素直で明るく礼儀正しい行動を取ることができ、友達や下級生に対して思いやりのある言動が見られる。集団登校での児童の礼儀正しい行動は地域の方にも広く知られており、地域全体で子供を守り育てていこうとする土壌がある本地域で、伝統的に育まれた道徳性の高さが感じられる。

昨年度より、「豊かにかかわり、よりよく生きようとする児童の育成～自分ごととして向き合い、考えを深める道德科の授業の工夫」を研究主題として、ね

らいとする道德的価値を明確にし、児童が道德的問題を自分事として捉えることができるような授業展開や発問を工夫しながら、考えを深める道德科の授業の研究を行った。

その結果、自分の考えに自信をもって自分ごととして意見交流をすることができ児童が増えた。また、ねらいとする道德的価値についてより自分事として考えたり、地域のよさを実感したりすることができるようになった。さらに、「あいあいタイム」など多様な価値観に気づき、考えを深める対話的な活動の推進をしたことで、友達の見解をどのように

「聴く」のか、意識することができるようになった。

しかし、小集団での学びを全体に広げ、練り合う際に、ねらいとする道德的価値に迫るような問い返しが不十分なために、児童の考えにあまり深まりがなかった。全体での話合いの質を高めるためには、児童が自分事として考えを深められるような発問を工夫したり、教師がファシリテーターとしての力量をより高めたりしていく必要がある。

そこで、昨年度の課題克服に向けて、児童が自分との関わりで捉えたり、物事を多面的・多角的に考えたりすることができるような発問や問い返しの改善を図ったり、小集団での対話活動や全体での練り合う活動の中で、考えを深められるような手立てを工夫したりすることで、自分の内面に問い掛けながら主体的によりよい生き方について考え、実践していこうとする児童を育てていきたいと考え、本主題の下、研究を深めることとした。

II 研究の目標

地域の特色を生かしながら人との関わりを大切にしたい道德教育を進めることで、豊かな心を持ち、共に高め合いながらよりよく生きようとする児童を育てる。

III 研究の仮説

ねらいとする道德的価値を明確にし、児童が道德的問題を自分事として捉えることができるような授業展開や発問の工夫をすることで、自分の内面に問い掛けながら主体的によりよい生き方について考え、実践していこうとする児童が育つであろう。

IV 研究の内容と方法

- 主体的・対話的で深い学びを実現する道德科の推進
- (1) 教材分析による道德的価値の明確化
 - (2) 自分事として、主体的に問い・考

V 研究の実際

主体的・対話的で深い学びを実現する道德科の推進

- (1) 教材分析シートの活用による道德的価値の明確化

教材分析をする際に、教材分析シート(資料1)を用いて授業づくりを行った。分析する項目は、「本時で考えさせたいこと」「教材の活用及び発問」「『あいあいタイム』の活用」「ねらいの具現化」の四点に絞り、効率的な教材分析ができるようにした。特に、児童同士が対話しながら考えを深める時間「あいあいタイム」の目的を明確にした上で、活用方法が具体的に分かるようにして授業展開を考えた。

教材分析シートを活用して授業の軸となる中心発問や問い返しを考えることで、ねらいとする道德的価値をしっかりとつ

かんだ上で授業の展開を考えることができ、児童がより深く自己を見つめたり考えを深めたりすることにつながった。

(2) **自分事として、主体的に問い・考える発問の工夫**

ア 主体的に問い・考えるための発問の構成の工夫

児童が主体的に問い・考える発問とは、次のような発問だと考える。

① 「児童の実態に即していて、心が揺さぶられるような発問」

② 「児童が自由に自分の感じ方や考えを表現でき、多様な価値観や考え方が出る発問」

③ 「何を問われているのが明確な発問」

④ 「自分事として考えられるような発問」

⑤ 「誰にでも答えられるような発問」

これらの発問を道徳科の授業の中で日々実践していくために、道徳科の発問構成を次の三段階として整理し、授業を組み立てていった。

第1段階 「中心発問を考える」
ねらいとする道徳的価値の内面的な自覚を深めるための最も重要な発問

第2段階 「基本発問を構成する」
各指導過程の中でねらいを達成するために欠かすことのできない発問

第3段階 「補助発問を配置する」
話し合いや思考を活性化するために基本発問や中心発問を補ったり、視点を変えたりする発問

中心発問、基本発問を考え、構成する際に参考としたい「主たるねらい」よっての発問例を整理すると、下のとおりである。

また、補助発問を配置する際に参考としたい「補助発問例」は、次頁のとおりである。

●主たるねらいよっての発問例

主たるねらい	発問例
主人公の行為や考えを手本や範例とさせる。 ・原因、理由を問う。 ・学んだことを問う。	・〇〇はどんな考えからそうしたのか。 ・〇〇が～したのはどんな気持ちからか。 ・なぜこのようになったんだろう。 ・〇〇からどんなことを考えたか。
主人公の立場になって考えさせる。 ・気持ちを問う。 ・考えを想像させる。	・〇〇はどんな気持ちか。 ・～している〇〇の心の中はどんな気持ちか。 ・〇〇はどんなことを考えながらしているのか。
感動を大事にした価値把握をさせる。 ・感動したことを問う。 ・感動したわけを問う。	・一番心を動かされたのはどこか。 ・なぜそこが心に残るのか。 ・いろんな感じ方を聞いてどう思うか。
主人公の行為や考えを批判させる。 ・自己見解や考えを問う。 ・自分の考えのわけを問う。	・～したことをどう思うか。 ・〇〇はどうすればよかったのか。 ・〇〇はこれからどうすればいいと思うか。

教材名（出典）	三つのまほう (愛媛県教育委員会「『愛』ある愛媛の道徳—小学校1, 2年生—」)
主題名（価値）	感謝の心を大切にしよう (B 感謝)
本時で考えさせたいこと	世話になっている人々への感謝の気持ちをじっくりと考えさせたい。
教材活用・発問	<p>中心となる学習</p> <p>【意図】 世話をしてくれている人々の善意に気付いたときの気持ちを考える。 ◎スキップしながら教室に入った「わたし」は、どんなことを思っているでしょう。</p> <p>(予想される児童の反応) → (問い返し) ・心が温かくなって、なんだかうれしいな。 →心が温かくなると、どんな気持ちかな。 ・けがしたけれど、うれしい気持ちでいっぱいだな。 →うれしい気持ちのほかに、どんな気持ちがあるかな。 ・こんなにたくさんの人が、わたしのことをお世話してくれているんだな。 →それに気付いたわたしは、どんな気持ちになったのかな。</p>
	<p>中心となる学習を支える学習</p> <p>【意図】 感謝を多面的に考えさせるために、世話をしてくれている人々の思いを想像する。 ◎3人は、どんな思いで「わたし」に声を掛けたのでしょうか。</p>
「あいあいタイム」の活用	<p>取り入れる場面</p> <p>世話をしてくれている人々の善意に気付いたときの気持ちを考える場面 ◎スキップしながら教室に入った「わたし」は、どんなことを思っているでしょう。</p>
	<p>活用方法</p> <p>個人 ↓ ペア ↓ 全体</p> <p>登場人物に自我関与して、自分自身が持っている感謝の気持ちを考える。(主体的な学び)</p> <p>自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを聞いたりして、自分自身がもっている感謝の気持ちを確かめさせる。(対話的な学び)</p> <p>自分自身がもっている感謝の気持ちを基に、多様な感じ方に触れることを通して、自分の感じ方を広げたり深めたりする。(深い学び)</p>
	<p>ねらいの具現化</p> <p>世話をしてくれる人々の思いや世話になったときの気持ちを、登場人物に自我関与して自分事として考えることで、世話になっている人々への感謝の気持ちを深め、家族や学校、地域社会で自分のためを思っていて支えてくれている人々に感謝しようとする心情を育てる。</p>

〈資料1 教材分析シート〉

●補助発問例

問い返しや追究する補助発問	「なぜそう思うのか？」 「〇〇とは何？」
詳述させる補助発問	「もっと詳しく教えて。」 「なぜ、〇〇が大切なのか？」
切り返す補助発問	「みんなもそう思うの？」 「〇〇君の気持ちが分かる人はいない？」
揺さぶりをかける補助発問	「本当にそうなの？」 「どうして〇〇の大切さは分かるのに、できないのかな？」 「どうすれば〇〇の行動ができるのかな？」



〈資料2 心情メーターの活用〉

イ 自分事として問い・考えるための思考ツールを活用した発問の工夫
道徳科の授業においては、教師の発問に対して、児童が自分の考えはもてるが明確にできず、相手にうまく伝えられないという課題がある。そこで、自分や友達の考えが視覚化される思考ツール（資料2、3）を活用し、自分の考えに自信をもって自分事として意見交流できるようにした。



〈資料3 Y字チャートを活用したワークシート〉

ウ ねらいに迫る発問や問い返しの工夫
三年「気づいていなかったこと」（内容項目B「礼儀」）の授業実践では、グループで話し合い活動をするときや、全体での話し合いの場面で、中心発問以外にも児童の考えをさらに深めるための補助発問や問い返しを適宜行った。その際、児童の考えが抽象的な場合は、より具体的な説明ができるようにしたり、児童の考えの根拠となる部分を引き出したりする

など、問い返しの工夫を意識して行った。児童に効果的な問い返しをすることで、それぞれの場面で相手の行いがどうして嫌なのか、何が迷惑なのかをさらに深く考えさせることができ、失礼な行いは、相手に嫌な思いをさせるといふ考えを引き出すことができた。

五年「名前のない手紙」（内容項目C「公正、公平、社会正義」）の授業実践では、児童から出た意見を心の「弱さ」と「強さ」に分け、登場人物の心の葛藤が視覚的に分かりやすいように整理しながら板書しようと計画していたが、児童から「弱さ」の面を表す考えがあまり発表されなかった。

そこで、「行動に移したことで不安や心配はなかったのだろうか」「本当に助きたい気持ちだけなのだろうか」という問い返しをしたことで、「わたし」を守りたいという気持ちと、自分自身を守りたいという人間の弱さとの間で葛藤する気持ちを引き出し、登場人物の気持ちを自分事として捉えることができた。

エ 発問の振り返り

研究授業後の研究協議では、自分事として問い・考える発問構成となっていたか、特に主発問を中心に授業研究部で振り返りを行った。そして、課題となった

5月17日 3年3組 道徳科 授業者 渡部 陽子

○いくつかの挿絵を見て、どの場面にも共通する相手の気持ちを問う発問について

- ・同じ挿絵を選んだグループの意見を比べて、共通する相手の気持ちを答える児童が多かった。
→「場面は違うけれど、相手の人はどんな気持ちになっているか。」というような焦点を絞った発問にする。
- ・失礼なことは相手を嫌な気持ちにさせるといふことを押さえた後、礼儀正しい行いのよさを考えさせたのは、児童の思考の流れに沿っていなかった。
→「それぞれの場面で、どうすればよかったのか。」というような望ましい行動を考えさせることで、礼儀正しい行いのよさについて考えさせる。

〈資料4 発問の振り返りのまとめ〉

部分については、よりよい発問にするにはどうすればよいか審議した（資料4）。学習展開の中で児童の考えが深まらなかった部分や、ねらいとする道徳的価値に迫るためにどのような発問に変えたらよいのか審議することで、自分事として問い・考える発問とはどのようなものかより深く考えることができ、その後の研究授業の指導案を作成する際に参考となった。

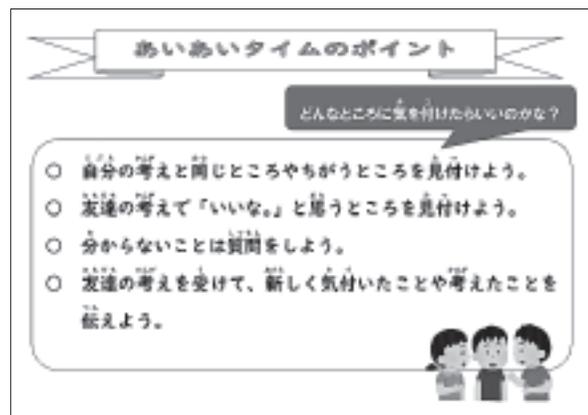
(3) 多様な価値観に気づき、考えを深める対話的な活動の推進

本校では、児童が仲間と対話し、考えを深めるための話し合い活動を「あいあいタイム」と位置付け、道徳科に限らず様々な教科で取り入れている。「あいあいタイム」を取り入れるに当たって、教員間の指導の差をなくすために、低・中・高学年で身に付けさせたい力（資料5）を示し、全教職員で共通理解を図った。

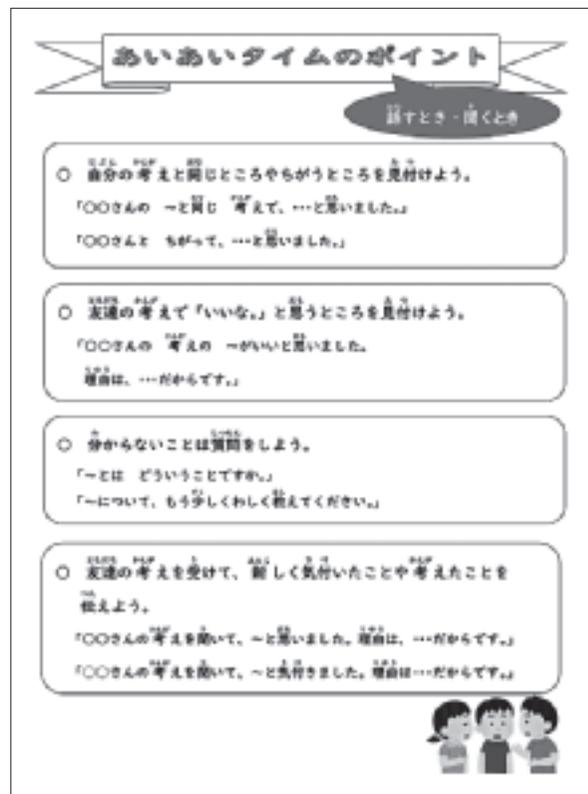
また、児童においては、「聴く」ことに重点を置き、「あいあいタイムのポイント」を作成して提示し、意見交流をす

低学年	友達の考えを聴く力の素地を養う。
中学年	複数の意見を聴き、自分の考えと比べる。
高学年	どのような場面でも自分の考えを言う。友達の考えを受けて、自分の考えを述べる。

〈資料5 身に付けさせたい力〉



〈資料6 掲示用あいあいタイムのポイント〉



〈資料7 児童用あいあいタイムのポイント〉

る際にそのポイントを基に交流するようにした。

基本となる聴き方を教室掲示用として作成し（資料6）、授業の際に活用できるようにした。さらに、聴き方のポイントを児童数分作成し（資料7）、道徳ノートに貼ることで児童一人一人が意識して意見交流ができるようにした。「あいあいタイムのポイント」を活用するこ

とで、児童は友達の意見をどのように「聴く」のか、意識することができるようになってきた。特に、自分の意見との

共通点や相違点、相手の意見のよい点について積極的に見付けようとしている児童が増えた。しかし、相手の意見を受けて自分の考えを深め、意見を述べたり、新たな考えをもったりすることは、まだまだ十分とは言えない。

「あいあいタイム」を取り入れた授業実践

(ア) 一年生の実践

一年「はしれ、さんりくてつどう」（内容項目C「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」）の授業実践では、「あいあいタイム」で、テーマに沿って自分の考えをワークシートに書いて交流し合った。その際、児童が「一人でじっくり考える」「友達と話し合う」「先生や

他の友達と集まって話し合う」の三つの形態を自由に選択できるようにした。

また、ワークシートも文章で書く形式のものやイメージマップで書く形式のものなど、児童の実態に合わせて複数準備した。その結果、児童が表現しやすい場を選ぶことができ、対話的な活動の活性化につながった。また、「あいあいタイム」を取り入れたことで、他者の多様な考えに触れることができた。

(イ) 二年生の実践

二年「およげない りすさん」（内容項目B「友情、信頼」）の授業実践では、中心発問で、個人の考えをワークシートに記入した後に、グループで意見を交流し合う場（「あいあいタイム」）を設けた。話し合いをする前に、話の聞き方のポイントを児童と確認し、「いいな」「なるほど」と思うところを見付け、友達の考えにうなずいたり反応を返したりすることへの意識付けを行った。ペアを替えながら考えを伝え合う場を設けたことで、多くの意見交流をして、多様な考えに触れ

ることができた。また、意見交流をすることで自分の考えに自信をもち、意欲的に発言しようとする児童も増えた。

(ウ) 三年生の実践

三年「気づいていなかったこと」（内容項目B「礼儀」）の授業実践では、教材の場面絵を見て、話し合う視点に沿って「あいあいタイム」を設けて話し合った。一つのグループにつき一つの場面絵を与え、絵を見ながらじっくりと話し合うことができるようにした。グループ活動に入る前に、一例を取り上げて全体で話し合う場を設けた。そして、話し合いの視点を確認してから、グループ活動を行った。話し合う視点を明確にしたことで、児童は、自分の考えをしっかりと「あいあいタイム」を行ったことで、児童は、気付いたことを自由に話したり、友達の意見を聞いて新たな気付きを伝えたりして、積極的に意見を出し合うことができた。また、全体の場で意見が出にくい児童も、小グループの中では自分

の考えを伝えることができ、多くの意見を引き出す手立てとなった。

(エ) 五年生の実践

五年「名前のない手紙」（内容項目C「公正、公平、社会正義」）の授業実践では、中心発問において話し合いの場を設け、友達の意見と比較することで、多面的・多角的に考えることができるようにした。このとき、一方的に相手に自分の考えを伝えるだけでなく、相手に理由やそこに込められている思いを聞き返すこと、発表者の話を聞いた上で自分の意見を伝えることなど、ルールを定めて取り組むようにした。

道徳科の授業の中で「あいあいタイム」を積極的に取り入れたことで、回数を重ねるごとに、少しずつ話し合いの深まりが見られるようになった。また、小グループで「あいあいタイム」を行ったことで、意見を発表しにくい児童も自分の考えや思いを友達に伝えることができた。

VI 研究の成果(○)と課題(●)

- 教材分析シートの活用による道徳的価値の明確化をすることで、ねらいとする道徳的価値をしつかりとつかんだ上で授業の展開を考えることができた。また、昨年度の取組の反省から教材分析シートに「あいあいタイム」の活用についての項目を追加し、より効果的に話し合い活動を取り入れることができれば活用できるものとなった。
- 児童にどの部分を深く考えさせたいのかという視点で発問を精選しながら学習展開を考え、中心発問に対して全体で考えを深める時間や振り返りの時間を十分に確保したことで、ねらいとする道徳的価値についてじっくりと考えさせることができた。
- 事前の教材分析に基づき、グループや全体での話し合いの場面で、中心発問以外にも補助発問や問い返しを適宜行ったことで、児童の考えが深まり、ねらいとする道徳的価値に迫ることが

できた。

- 対話的な活動(「あいあいタイム」)において効果的な活用方法を検討し、ペアやグループ、全体など、話し合いの形態を工夫したり、取り入れる場面を精選したりしたことで、児童の考えの深まりや広がりにつながり、ねらいとする道徳的価値について多面的・多角的に考えることができるようになった。
- 「あいあいタイムのポイント」を活用することで、友達の意見をどのように「聴く」のか、意識して活動することができるようになった。また、「あいあいタイム」を通して、友達の考えのよさや新しい考えに目を向ける力も育ってきており、友達と対話するよさを実感する児童が増えてきた。
- ねらいに迫るための発問を検討してきたが、今後はさらに児童が考えてみたくなるような発問内容や構成を工夫し、児童自らが考え、主体的に学習に取り組むことができるように質を高めていく必要がある。
- 児童の考えをさらに深めたり広げた

りするためには、問い返しが必要である。事前に教材分析をする際に、発問に対する児童の発言内容を十分に予想し、どのような問い返しをするのか準備しておくことで、児童の考えを深めたり広げたりすることにつながると考えられる。

- 「あいあいタイム」では、ワークシートに書いてあることを伝えるだけの児童も見られる。思考ツールやICTを効果的に活用し、自分の考えの根拠となることについて付け足しをしながら、さらに深まりのある話し合い活動となるように工夫していきたい。